

Appointment and Web-based Communication Division

2020年12月

秋号
—Vol.41—

連携室
だより



人事消息

	新任医師 令和2年10月1日付 循環器内科 岸上 直広
	新任医師 令和2年10月1日付 腎臓内科 松田 正大
	新任医師 令和2年10月1日付 臨床研修医 萩原 千葉 拓
	退職者 令和2年9月30日付 循環器内科 大友 俊作

理念

赤十字の基本理念に基づき、個人の尊厳および権利を尊重し質の高い医療を提供します

基本方針

- 1.患者さまの人権と意思を尊重した病院環境をつくります
- 2.急性期医療を中心にして診療を進めます
- 3.救急医療の充実に努めます
- 4.地域の医療機関等との連携を推進します
- 5.国内外の災害時の医療救護活動に貢献します
- 6.職員の教育、研修を充実させます
- 7.健全経営に留意して、その結果を社会に還元します

私たちが患者さまの権利を尊重します



旭川赤十字病院職員行動規範 5つの約束

- 1.私たちは、来院される方と職員に笑顔で挨拶をします
- 2.私たちは、初対面の患者さまに、自己紹介をします
- 3.私たちは、電話の最初に、部署と名前を名乗ります
- 4.私たちは、患者さまに診察や説明をしたあとに「何かわからないことやご質問はありませんか?」とお尋ねします
- 5.私たちは、院内で迷われている皆様にお声掛けをし、ご案内します

編集後記

表紙の写真は当院副院長の瀧澤が撮影したものです。世界各国の選りすぐりの写真をご用意していますので、次回冬号も「瀧澤の車窓から」を楽しみにお待ちください。

(発行)

旭川赤十字病院 地域医療連携室

〒070-8530 北海道旭川市曙1条1丁目1番1号

tel.(0166)22-8111(代表) fax.(0166)22-8287(直通)

URL <https://www.asahikawa.jrc.or.jp/> Email renkei@asahikawa.jrc.or.jp

脳卒中ホットラインについて
メタボリックサージェリーについて
ベッドコントロール室の紹介／免疫力を高める食事
不整脈治療専門臨床工学技士の紹介
血糖コントロールに係る薬剤投与関連の特定行為研修修了看護師の紹介
症例検討会実施報告／医療支援センターについて／医療連携の集いのお知らせ
オロロンライン出張報告

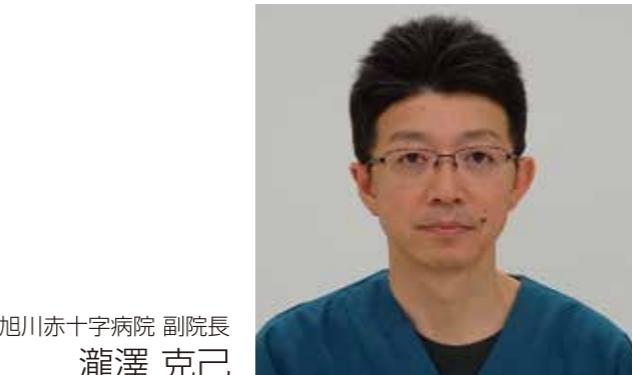
脳卒中・脳疾患ホットラインを開始して

各医療機関におかれましては、日頃より病診連携で大変にお世話になっておりますことを、改めましてお礼を申し上げます。

当院ではさらなる連携の充実を目指して、2020年9月より「脳卒中・脳疾患ホットライン」の運用を開始させていただきました。脳卒中では発症早期の迅速で適切な治療が重要であります。特に脳梗塞の急性期治療では、血管内治療による血栓回収療法が非常に重要な治療法となっており、この治療を受けられるかどうかによって患者さんの予後が大きく変わってきます。しかしながら、現状では道北地方においてこの治療を行えるのは、当院を含め数施設しかありません。多くの患者様にこの治療が適応できるようにより多くの患者さんの紹介をいただくことと、患者さんの受け入れから治療までの迅速化、効率化を図ることが本ホットライン導入の目的のひとつであります。運用開始から10月14日までに20施設より33件のご利用をいただきました。33件のうち26例で入院加療をしており、血栓回収療法を行った症例は2例ありました。また、脳卒中がどうかわからな

いけども何か変ということでご紹介いただいたところ、来院後の検査で大動脈解離が判明し緊急手術となった症例や耳鼻咽喉科に入院となった症例も2例ありました。本ホットラインでは当院への患者紹介の敷居をさげて、紹介をしやすい環境を作るということも目的としており、少しづつ目的にあった利用が増えてきているように実感しております。

2019年12月1日に、いわゆる『脳卒中循環器病対策基本法』が施行されましたが、この中でも急性期治療を行う医療体制の整備が求められています。当院においても道北地方における包括的脳卒中センターとして機能できるよう、今以上に充実した体制の整備を行うとともに、今まで通り24時間365日いつでも断ることなく、どのような患者さんでも受け入れを行っていく所存であります。明らかな脳卒中の患者さんでなくても、「何かおかしい」、「良くわからない」など、困った症例がおられましたら、お気軽に「脳卒中ホットライン」をご活用し、ご紹介いただければと思います。今後ともよろしくお願い申し上げます。



旭川赤十字病院 副院長
瀧澤 克己

道北地区唯一の肥満外科手術を開始しました

当院で保険診療として施行可能となった肥満症に対するメタボリックサージェリーについてご紹介させて頂きます。肥満症は糖尿病、高血圧、高脂血症、睡眠時無呼吸症候群などの生活習慣病の一因となっており、その結果、心筋梗塞、脳梗塞等の命に係わる疾患を引き起こします。日本においても食生活やライフスタイルの変化から確実に肥満人口の割合は増加しています。肥満症治療の中心は食事、運動、薬物療法などの内科的治療ですが、95%は長期的な体重減少を維持できないでいます。現在、長期的な体重減少を維持する唯一の治療法が肥満外科手術となっております。本邦は欧米と比べると歴史が浅く、症例数が少ないのですが、2014年に保険収載されてから、症例数が増加の一途をたどっており、北海道では北海道大学病院消化器外科Ⅱにおいて2016年に本手術が導入されました。以降、同病院において症例が蓄積されてきました。

本手術の施行後、リバウンド予防のために5年は同施設で経過観察をしなければなりません。北海道という広い範囲を北海道大学病院のみでカバーするには患者様の負担も大きく、各地域における拠点病院の整備が必要な

状況でした。北海道大学病院で同手術を経験した山本が2019年4月に当院に赴任し、肥満外科治療拠点病院としての施設認定取得、コメディカルとの体制作りに着手し、同年11月より同手術を開始しました。その後、症例数を順調に重ね2020年11月までに5例の手術を施行しました。肥満外科治療において良好な結果を出すには医師だけではなく、看護師、薬剤師、栄養士、運動トレーナー、検査技師の連携が不可欠ですが、幸い当院には情熱に溢れた非常に優秀なスタッフが揃っており、チーム医療により良好な結果をだせています。

当院外科はメタボリックサージェリーの他にも、特に腹腔鏡手術に力を注いでおり、現在、一部の肝胆脾疾患を除いて、ほぼ全ての外科手術を腹腔鏡手術で行っております。また患者様の希望に応じて、通常よりも創の少ない、小さい reduced port surgery にも積極的に取り組んでおります。特に胃癌、大腸癌は質の高い精緻な腹腔鏡手術を提供することをお約束いたしますので、そのような患者様がいらっしゃいましたら、ぜひとも当院にご紹介頂きたいと思います。

(旭川赤十字病院 外科 山本 和幸)



旭川赤十字病院ベッドコントロール室を紹介します

ベッドコントロール室 看護副部長 千代 慶子

【旭川赤十字病院の役割とベッドコントロール室】

当院は地域医療支援病院、救命救急センターとして、地域の医療機関と密接に連携し高度医療・救急医療を提供しています。当院の予定入院と緊急入院の割合は約5.5対4.5となっており、常時、緊急入院の病床を確保しておく必要があります。

当院のベッドコントロール室は2019年4月に設置し、構成メンバーは救命救急センター長1名、看護副部長1名、看護師長1名、事務職員の体制をとっています。ベッドコントロール室は予定入院・紹介・救急患者の全ての入院を受け入れ、遅滞なく治療・看護が提供できるよう、院内全体の病床稼働状況を把握し日々ベッドコントロールを行っています。



【ベッドコントロール室の活動】

□ベッドコントロール会議

会議では、入院部署の看護師長とともに病床稼働状況、入院・退院患者の情報を集約し、常時、救急患者、重症患者を受け入れることができるように患者転棟計画を立て、調整を行っています。

□緊急入院のベッドコントロール

地域医療機関からの紹介患者の緊急入院、救急搬送患者の入院病床の決定を行っています。

□各診療科へのベッド調整の依頼

病床確保が調整困難な場合は、新入院患者の病床確保のために、各診療科にベッド調整の依頼を行っています。

当院は新型コロナ感染症患者に対応した診療体制を整備し、専門病床も新たに設置しております。日々変化する社会情勢や医療提供体制の中、ベッドコントロールは容易ではないことを実感しております。そして、当院は「地域の医療を守るために各医療機関と協力して質の高い医療を提供する」という使命を果たすべく旭川赤十字病院のベッドコントロール室として邁進してまいります。

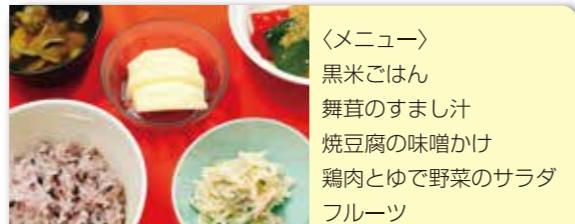
免疫力を高める食事

医療技術部 栄養課 課長 長瀬 まり

新型コロナウイルスに押しつぶされそうな毎日の中、感染を恐れ体調が悪くても受診を控える患者さんや、経済的な影響から、食事は1日1食しか食べないなという方もいらっしゃいます。麺やパンのみの食事では食事が偏り、年齢にかかわらず栄養摂取不足や腸内環境の悪化につながりがちです。

腸には体全体の免疫細胞の半数以上が集まるとされ、腸内環境を整えることで免疫力を維持することにつながります。生きて腸まで届くタイプの乳酸菌やビフィズス菌は、腸内で乳酸や酢酸を作り、有害菌の増殖を抑え腸内環境の改善につながり最近では死菌であっても効果が期待できると考えられています。食物繊維も腸内の悪玉菌を減少させ、有害物質も減らす効果があるとされています。味噌や醤油、納豆、漬物、甘酒、ヨーグルト、チーズなどの発酵食品に含まれる菌も善玉菌を増加させ腸内細菌叢を整え免疫力アップにつながるそうです。

しかし、ひとつの食品だけたくさん食べても効果はなく、免疫力を高める食事の基本は、これらの食品を取り入れながら、主食+蛋白質のおかず+野菜のおかずをそろえてバランスよく食べること。免疫細胞の材料なる肉、魚、卵、大豆などの蛋白質を過不足なく摂り、野菜やきのこをたっぷりとすることでβカロテン、



【鶏肉とゆで野菜のサラダ】211kcal 蛋白質7.8g 塩分0.6g
材料(2人分)／若鶏もも肉60g・もやし100g・人参16g・豆苗20g・こしょう0.01g・食塩0.6g・酢3.0g・マヨネーズ32g
1.鶏もも肉は塩・こしょうしてオーブンで焼き、小さめの一口大にカットする。
2.人参は千切り、豆苗は2cm程度にカットにする。
3.マヨネーズに酢を加えてのぼし、1.2.を和える。

ビタミンC・E、フィトケミカルが免疫力を高めます。辛み成分ジングロンが体を温め血行を改善し殺菌作用もあるという生姜にも効果が期待できます。

何よりも大切なのは楽しみながら食事をすることであり、リラックス効果で免疫細胞が活性化するそうです。

写真は当院の病院食で、主食+蛋白質のおかず+野菜のおかずの一例です。腸内環境を整える野菜がとれリーズナブルな「ゆで野菜サラダ」をご紹介します。おうちでお試しいただけると幸いです。材料は変更して構いませんので、北海道の地元でとれるおいしいお野菜でもぜひお試しください。

「不整脈治療専門臨床工学技士」のご紹介

医療技術部 臨床工学技士長 脇田 邦彦

臨床工学技士には呼吸・代謝・循環分野において数多くの認定制度があります。今回紹介する「不整脈治療専門臨床工学技士」は臨床工学技士の上位資格で不整脈全般の治療を専門とする認定資格です。具体的にはペースメーカー治療、アブレーション治療、ICD／CRTD、遠隔モニタリングなどの不整脈治療全般、関連疾患のフォローアップとトラブルシューティングスキルを持った臨床工学技士として治療に参画し、さらに指導できる立場の人材として認められるものです。

不整脈治療専門臨床工学技士の資格は取得が難しく、再チャレンジ、再々チャレンジしても合格できずにおきらめる臨床工学技士がいるほどで、合格率は10%台の難関です。

当院の認定者は本年5月に新たに2名合格し、先に取得している2名と合わせ合計4名となりました。不整脈治療専門臨床工学技士が1名もない施設がたくさんある中で4名もいる施設は全国を見渡しても稀少であると自負できます。

不整脈治療は医師、看護師、診療放射線技師、臨床工学技士のチーム医療です。良好な連携がなければうまく機能しません。毎週、循環器内科医師を中心に臨床工学技士と関係スタッフが集まり事前の症例検討を行い、さらに定期的に勉強会も開催してスキルアップ

を図っています。認定を取得した臨床工学技士はもとより、若手の臨床工学技士の中にも認定者に匹敵するレベルに成長しているスタッフもあり大変頼もしく思っています。

救命救急センターに搬入される急患の中にはAMIなどの循環器疾患も多く、常に冷静・迅速・確実な対応が求められます。急変してPCPSというケースも時々あり、病態が刻々と変化する症例に臨機応変に対応するにはハイレベルなスキルが求められます。

今後さらに循環器疾患に対するスキルアップを図り、質の高い医療を提供することで地域医療に貢献できるよう努力し続けたいと思います。



(左)黒田恭介臨床工学技士 (右)小野寺哲兵臨床工学技士

日本赤十字社特定行為研修を修了して

旭川赤十字訪問看護ステーション 山梨 良枝

旭川赤十字訪問看護ステーションに在籍している山梨と申します。日本赤十字社の特定行為研修で、血糖コントロールに係る薬剤投与関連の区分における「インスリンの投与量調整」を令和2年5月20日付で修了いたしました。

訪問看護ステーションは、糖尿病の利用者が約3割を占めています。訪問時に低血糖や高血糖、インスリンの施行忘れ等で、インスリン調整の判断を迫られる場面が多く対応に難渋することもありました。特定行為研修修了者は、手順書を用いることで医師の診断を待たずに病態を判断し速やかにインスリンの調整の対応ができる事を知り、受講することを決意しました。

特定行為研修はeラーニングを主としており、現職場に在籍しながら学びました。放送大学の「共通科目」(演習・実習含め317.9時間)と、日本赤十字社の「区分別科目」(演習・実習を含め36時間)を受講し、特定行為研修指定研修機関である旭川赤十字病院で演習・実習を行い、1年6ヶ月で修了しました。

現在、特定行為対象者は当訪問看護ステーションの利用者8名で、うち7名は旭川赤十字病院、うち1名は地域の医療機関と連携しています。特定行為対象の利用者

は、血糖のコントロールに関して「相談しやすく安心だ」と在宅療養を継続されています。

訪問看護ステーションでは、地域の医療機関の医師や多職種と連携を図り、患者が安心して在宅療養ができるお手伝いをしていきたいと思っています。「血糖コントロールに不安があるが退院したい」「血糖が高いが入院したくない」等、不安を抱える患者がいらっしゃいましたら、紹介ください。



第20回旭川赤十字病院症例検討会の開催について

地域医療連携室 室長 篠田 珠美

例年開催しております症例検討会はこの度のコロナ禍の影響から当院会場とWEB双方を利用したハイブリット型を採用し、10月21日に開催いたしました。

院外からの参加者については、来院9名、WEBでは利尻島国保中央病院、留萌市立病院、道北勤医協一条通病院、旭川リハビリテーション病院の4病院の皆様にご参加いただきました。

司会の瀧澤副院長から演題「慢性硬膜下血腫について」を博愛内科クリニック渡邊淳院長、当院脳神経外科小野寺康暉医師により博愛内科クリニックから脳梗塞疑いで当院に紹介された患者の経過について発表していただきました。

渡邊院長はWEBで参加及び発表していただきました。発表当日も午後の診療に40人の来院があったとお話をいただき、そのような忙しい診療の中、準備していただきありがとうございました。

最後になりますが、瀧澤副院長とWEBで参加の各病院の皆様とディスカッションしていただき、そしてお忙しい中、院外からたくさんのご参加を賜りまして、誠にありがとうございました。

追伸ではありますが、この度のWEB研修会実施については、地域医療連携室の飛騨、山田結両名が1か月前から運営にあたり事前準備、繰り返し練習を行い、無事に症例検討会を行うことができました。また、デジタル推進室の阿部室長、長谷川係長からは100点満点のお墨付きをいただきました。当課でのWEB研修は初めての試みでしたが、飛騨、山田結両名の活躍によって滞りなくできることは室長冥利につきました。



医療支援センター 相談支援係&療養支援係の紹介

医療支援センター 入退院支援室 療養支援係長 大西 理樹

前号でご紹介したように、入退院支援室には、入院支援係(入院支援コーナー)を含め、4つの係があります。今回は、医療ソーシャルワーカー(以下MSW)9名が在籍している相談支援係と療養支援係をご紹介いたします。

MSWは病棟担当制としており、入院時または、入院前から患者・家族に介入しています。入院支援係と退院支援係の看護師と協力し、患者・家族が住み慣れた地域で安心して生活を継続するための退院支援をしております。退院支援の中でも、転院や外来リハビリの調整は、主としてMSWが行っています。地域の医療機関のみなさまのご協力のおかげでスムーズな調整ができるおり、この場をお借りしてお礼申し上げます。

また、療養生活上の困りごとや、医療費等の経済的な問題、各種福祉制度のことなどの相談にも対応しております。相談支援としては、セカンドオピニオンや、針刺し事故等のHIV暴露発生時の窓口にもなっております。

ですので、必要時には是非ご相談ください。

今後も地域の医療機関並びに地域住民のみなさまのご期待に応えられるよう、スタッフ全員で努力してまいりますので、ご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い申しあげます。



2020年度 旭川赤十字病院医療連携の集いの開催について

地域医療連携室 室長 篠田 珠美

毎年2月に開催している旭川赤十字病院医療連携の集いですが、今年度も開催する方向で検討を進めております。

新型コロナウイルス感染症の状況によっては、予定は変更となる場合がありますが、詳細につきましては、当院より改めてご連絡いたします。

オロロンオンライン病院訪問記

地域医療連携室 室長 篠田 珠美

4つ目の訪問先、北海道立羽幌病院では院長、副院长、地域連携室の皆様からお話を聞けました。iネットについては、この度地域連携室の方が準会員となっていましたので、退院サマリやデータの情報共有に役立てていただいている。また、北海道立羽幌病院は当院から医師の派遣、研修医の総合内科研修等、相互に協力できる病院となっております。

【まとめ】

今回は稚内からオロロンラインを海岸線に沿って訪問させていただきました。あいにくの天候でしたが、各病院の皆様には温かく迎えていただき厚く御礼申し上げます。

最初に訪問の市立稚内病院では事務長・地域連携支援課の皆様に迎えていただきお話を伺いました。地域連携について確認したところ、道北北部医療ネットワーク(ポラリスネットワーク)システムで名寄市立総合病院と連携し運用されておりました。joinに関しては近隣の診療所や名寄市立総合病院との連携で準備を進めているそうで、脳卒中での連携をお願いしてきました。あわせて、iネットの再設定をさせていただきました。

2つ目の訪問先の天塩町立国民健康保険病院では橋本院長にjoinについて説明いたしました。余談ですが、橋本院長は大阪で救急病院に勤務し、化学療法、人工透析など多くの治療にかかわってきたそうです。

3つ目の訪問先、遠別町立国保病院では院長、事務部長、事務の皆様にご対応いただきました。お話の中で病院の建て替えの予定があることなどお話をしていただきました。後日、登録医に登録申込がありました。この場を借りて御礼申し上げます。

